三鷹市立高山小学校　令和8年度【　　理　　】科　授業改善推進プラン

	前年度授業改善推進プランの検証	学習状況の現状と課題	指導方法の課題と授業改善策
第1学年			
第2学年			
第3学年	○単元の導入で体験的な活動をさせることで、実感をもって根拠を明確にして予想を立てることができるようになってきた。 ○実験の振り返りや復習として動画教材を活用することで、児童の興味関心を高めるとともに、知識の定着を図ることができた。 ○ノートに①予想、②観察・実験、③結果、④考えたことの順で書かせることで、学習の流れが定着し、見通しをもって学習ができるようになった。	○種から「ヒマワリ、ホウセンカ、オクラ、ダイズ」の4種を育てたり、ヤゴ・モンシロチョウを教室で飼育したりする体験を通して、高い関心をもちながら観察や学習に取り組むことができた。 ○身近な現象や生活体験、既習事項から、実験結果は大まかに予想することができる児童が多い。 ○適切な実験方法を考えたり、実験結果から分かったことをまとめたり、考察を深めたりすることには課題がある。	○動画教材を単元の導入や実験の振り返り、終末等で活用し、興味関心を高める。 ○体験的な活動を多く取り入れ、実感をもって予想を立てたり、考察したりできるようにする。 ○ノートは、年間を通して、①予想（体験したことからの気付きなど）、②実験計画、③観察・実験（記録）、④結果（観察・実験からわかったことをまとめる）、⑤考えたこと（結果を比べ、考えをまとめる）の項目に分け、見通しをもって学習していく習慣を身に着けられるようにする。 ○予想や仮説から実験計画を立て、「この実験で何を調べるのか」「どんな結果になったら、何が言えるのか」という見通しをもった状態で実験に取り組めるようにする。 ○自分の考えを自力で書くことができない児童には、例を示したり、友達と話し合ったりノートを見合ったりする機会を作って指導する。
第4学年	○実験の流れを黒板に示したり、教科書や動画で確認したりすることで、見通しをもって行うことができる児童が増えた。 ○問題の予想をする際に、「理由は～だから」という話型を与えてノートに書かせたり、常に声掛けをしたりすることで、既習事項や生活経験を理由に予想を立てる力が向上した。考えをクラス全体で共有し、自分と他の児童との考えを比べることもできた。 ○自然事象との出会いの場面では、植物を実際に観察したり、日常生活を振り返ったりする活動を通して、意欲的に学習に取り組む児童が増えた。 ○結果を基に考察することなど関係付けることができる児童がまだ少ないため、引き続き指導を行っていく必要がある。	○実験や観察が好きな児童が多く、意欲的に学習に取り組むことができる。 ○実験は、複雑な手順や方法の場合、全体指示で理解して行うことが難しい児童がいる。 ○観察は、細かいところまで良く見て絵を描いたり、気付いたことを文で詳しく書いたりできる児童もいるが、細かい部分まで観察できていない児童もいるため、個人差が大きい。 ○予想は生活経験や単元導入での活動を基に、根拠を明らかにして書くことができる児童もいるが、根拠を書くことができない児童も一定数いる。生活と結び付けて考察を書くことが難しい児童が多い。	○いくつかの事象の違いに着目させて、問題作りを行うことで、何を明らかにしていく実験なのか、児童がしっかりと理解した上で学習が進むようにし、理解を深められるようにする。また、学習課題を身近な事象と関連付けて提示し、自分事として捉えさせる。 ○予想や立てる際に、理由も書くように促す。その際、「生活経験で似たようなことがなかったか」「既習事項で関連することはなかったか」等、教師と一緒に考える時間を設け、全員が根拠をもって予想し、表現する力を高める。 ○観察を行う際は、「色・形・大きさ」「他の生物と比べて同じところ、違うところ」「その他に気付いたこと」など、書く視点を明示することで、細かいところまで観察できる力を身に付ける。 ○実験を行う前に教師が演示実験を行うことや児童へ実験の手順を示した動画視聴をさせることで、見通しをもって実験に取り組んだり、道具の使い方を理解して取り組んだりできるようにする。
第5学年	○学習用タブレット端末を使って顕微鏡写真や実験の様子を撮影することにより、ゆっくり事象と向き合い記録したり、実験の振り返りや考察を行う際に何度も見たりすることができた。 ○比較して要因を考えるなど、事象の手合わせ方を工夫することで、問題をつかみ、実験・観察にとても意欲的に取り組めた。結果や考察などの記録が不十分な児童が多い。根拠を書こうとする児童は多くなった。	○学習用タブレット端末の使用に慣れている児童が多く、顕微鏡の様子を写真や動画で撮ることで、視点をはっきりさせてじっくり細かな部分まで観察して気付けたり、見付けたことを知らせたいと友達にも様子を言葉で伝えながら見せたりする姿が見られた。しかし、特徴を図や言葉で表現してノートに記録することに苦労している児童は多い。 ○考察の書き方に慣れてきている。ただ、変化の要因を結果から見つけて言葉にしたり、整理したりすることが苦手な児童もまだ多い。 ○実験や観察することには興味をもち参加できるが、記録が苦手な児童が多い。	○既習事項を振り返ったり、関連することを生活の中で探したりして、考える材料を増やす。また、視点をはっきり示し、見方や考え方を提示して個で考え表現する場を確保するようにする。お互いに見合えるように学習用タブレット端末を活用したり、ヒントカードを用意したり、不安をもつ児童の助けや学び合いができるようにする。科学用語辞典をつくらせ、ドリル的なことも取り入れることで、理科の言葉をや基礎基本を定着できるようにする。 ○事実の記録と分かったことの記録を発表時に板書で整理し、区別しやすいようにする。
第6学年	○意欲的な児童も多いが、実験などに協力できず、安全の配慮が足りない児童も見られた。実験の記録の丁寧さの個人差がとても大きい。 ○考察の基本的な書き方を提示し、選択させることで、折に触れて見返し、自分で選んで考察が書けるようになった。 ○学習用タブレット端末を活用することで、グループでの意見交換が活発になり、ドリルに取り組む時間をとりやすかったので、課題に積極的に取り組む児童は増えた	○実験や観察に対して非常に意欲的に取り組む児童とそうでない児童の差が大きい。自ら工夫したり活用したりしようとする姿はあまり見られない。 ○繰り返すことで、根拠を書いたり、適切な言葉で表現したりすることができるようになった児童も増えてきた。 ○知識が概念的な理解へとなかなか広がらない。知識の定着度は個人差が大きく、テストの結果も７割を切る児童が２割ほどいる。授業にすすんで取り組んでいる児童は知識が定着していなくても、理科的な考え方はできるようになってきた。 ○学習用タブレット端末を道具として良く使うことができる。検索のキーワードを見付けることはまだ上手ではなくAIの回答で済ましてしまう児童も多い。	○理解を深めて概念化できるようにするためにも、体感することを大切にし、実際に観察したり、少人数で器具を操作したりできるようにする。映像的な助けとして動画コンテンツなども活用する。実際の生活での活用にも目を向け、共有できるようにする。 ○書き終えた児童の文章を紹介して文例として示したり、問題文などは基本の話型を示したりする。 ○個を生かしたり、すすんで取り組む時間を増やしたりするため、調べ学習では、大きなテーマを基に、自分のテーマを決めて取り組む時間を意図的に取り入れる。自分で小さなテーマを決めることで自主的に取り組めると考える。また、インターネットだけでなく、司書にも協力をお願いして本も用意する。記録にも出典を書くようにする。まとめもノートに書く、または、スライドを作成するなど自分で選択できるようにする。 ○基本を定着できるように、ドリル的なことも取り入れて復習の機会を作る。